

## 物語の絵画化の一様相について —『釈迦堂縁起絵巻』の場合—

井面 舞（京都大学大学院）

「釈迦堂縁起絵巻」は京都・清凉寺の本尊の由来を描いた全六巻の絵巻である。制作年は永正十二年（1515）、絵は狩野元信（1476-1559）の筆とされている。

本作においてまず目を引くのは、明確な輪郭線と濃密な彩色を持つ霞である。この霞は上代絵巻の霞とは形態・役割において一線を画すものであり、本作の画面構成に大きな影響を与えている。「霞」の機能一般については、すでに武田恒夫氏や若杉準治氏の著書<sup>1</sup>において研究がなされているが、いずれも場面転換や時間推移を表現するという根本的な役割の指摘にとどまっている。そのような中で、塩出貴美子氏は特定の絵巻の画面構成について積極的に考察し、ある作品における霞の特徴と画面構成の関係のメカニズムは必ずしも他の作品においても応用可能なものではないことを指摘した<sup>2</sup>。それに従うなら、個々の作品にはその文脈に沿った霞の形態の変化とそれに伴って新たに付与される機能があるはずだということになる。しかし、そういった特定の絵巻作品における霞と画面構成の関係については、これまであまり論じられなかったといえる。

この発表は本作の霞の形態と役割を明らかにしたうえで「釈迦堂縁起絵巻」の画面構成を分析することを通して、画面構成の特徴が指し示すこの物語世界はどのようなものとして鑑賞者の目に映るのか、言いかえれば物語世界をどのような姿で提示しているのかを明らかにすることを目的とするものである。

発表では、まず本作の霞が物語世界の外にあって、画中の空間を区切り限定する枠としての性質の強い「固形 (solid) 化」されたものであることを述べる。そしてそれらの霞が画面内の情報量に粗密をつけることで主題部分を際立たせ、それぞれの場面を独立させる役割を果たしていることを明らかにする。さらにそれら独立化した場面は継起的に並べられることで物語の深い理解なしに観者が話の展開を追いかけることのできる、視覚的な明快さを画面全体に与えていることを指摘する。

さらに、この視覚的明快さは本作を読み解ける人間の層を拡大するものとなったであろうことに言及する。すなわち、本作は複雑な絵解きのテクニックなしに理解できる絵画であり、それ故多くの民衆に受け入れられる絵画だと言える。このことから本作がより合理的な絵解きを目的とした大型の掛幅のような大画面への展開が企図されていた可能性を指摘する。

また、本作の霞は漫画の枠線のように、物語世界に対して完全に異質なものではないということについても考察する。本作の霞は枠でありながらもそれが物語世界の自然現象として描かれてきた「霞」である以上、物語世界から完全に逸脱せずその外と内の両方に属する存在と言える。それは物語世界と観者の間において、両者を隔てつつ繋ぐものである。本作を見るとき、観者は霞ごしに物語世界を覗いているような感覚を覚える。それは洛中洛外図のような金雲ごしに街を俯瞰する構造の絵画に似ている。このことから本作の画面構成は、近世的な新しい絵画形式へと向かう予兆を感じさせるものであることを指摘する。

<sup>1</sup> 『日本絵画と歳時 景物画史論』、武田恒夫著、1990年4月15日、ペリかん社  
『絵巻物の観賞基礎知識』、若杉準治編、1995年11月20日、至文堂

<sup>2</sup> 塩出（瀧尾）貴美子「絵巻における「場面」と「景」、（『美術史』111号、美術史学会、1981年11月）